人間文化創成科学論叢　第11巻　2008年

『失われた時を求めて』における想像力と感受性

――「無意志的記憶」の事例をめぐって――

菊　池　博　子*

Imagination et sensibilité dans *A la Recherche du Temps Perdu*

――sur des cas de « mémoire involontaire »

KIKUCHI Hiroko

Résumé

Selon les récents travaux de recherche de Eiko Nakamura, mémoire involontaire et réminiscence dans *A la Recherche du Temps Perdu* par Proust seraient deux types différents de mémoire inconsciente. Cependant, une expression de Proust précise que la réminiscence est un genre de mémoire involontaire. Concernant la mémoire, nous réaffirmons des idées communes entre Bergson et Proust.

Nakamura fait des événements évoqués par la mémoire involontaire le produit de l'imagination de Proust et non de l'observation ou de la mémoire. Toutefois, en supposant une superposition du roman écrit par l'Auteur et celui dû au Narrateur, la mémoire involontaire fonctionne plutôt dans l'œuvre du Narrateur. Ceci limiterait la pertinence des travaux susdits au cas du roman écrit par l'Auteur.

Dans le roman du Narrateur, l'imagination est effective avec la présence de la sensation d'un passé, d'autre part la sensibilité en fait fonction dans son absence. Toutes les deux sont associées avec les conditions nécessaires chez Proust pour écrire : l'essence des choses, l'intelligence, et toute la vie de l'auteur.

Keywords : Marcel Proust, In Search of Lost Time, involuntary memory, imagination, sensibility

序論

マルセル・プルーストは、本稿で取り上げる長編小説『失われた時を求めて』[1] の執筆以前に、何人かの哲学者の思想の影響を受けており[2]、その影響下に、事物の本質を文学の中に求め、文体としての「比喩」の持つ意味に到達した（IV, p.468）と思われる。作家が自分の芸術論をその上に据えると語る「無意志的記憶（mémoire involontaire）」の事例「レミニサンス」の理論は、文体としての「比喩」に関する方法論を支えるものとなる。

この小説を対象とした中村栄子氏の最近の著書『プルーストの想像世界』[3] の中では、「無意志的記憶」と「レミニサンス」との相違、又、プルーストの「想像力」について、およそ次のように述べられている。

> 無意志的記憶（souvenir involontaire）」という言葉は「第四篇「ソドムとゴモラ」中の「心情の間歇」の節の語り手の亡き祖母の記憶の想起に使われている。（祖母と同じく作家の母の置き換えである恋人アルベ

キーワード：マルセル・プルースト、『失われた時を求めて』、無意志的記憶、想像力、感受性

＊平成17年度生　比較社会文化学専攻

ルチーヌの記述にも一度使われている。又、mémoireとsouvenirは辞書上の意味の相違はあるがプルーストは明確な区別をしていない)。この記憶の想起は他の例にはない心身の衝撃を伴う。
一方、同じく無意志的な記憶の再生を表す「レミニサンス」という言葉は、詩語、雅語として使われている。例えば、「レミニサンス［論者註：「レミニサンスのような (à la façon des réminiscences)」］とされるユディメニルの三本の木のエピソードは、絵画、神話、他の文学作品を参考にした、作家の想像力から生み出されたものである。小説中のプルーストの記述は、現実の観察から出発したものではなく、記憶に基づくものでもない。「無意志的記憶」は理論先行の、意図的、計画的フィクションである。

本稿では、中村氏の論の提示を機会に、「無意志的記憶」と「レミニサンス」との関係及びプルーストにおける「想像力」の意味、特に「感受性」との関連について改めて考察を加える。又、「見出された時」中で述べられる文学創造の要件と「無意志的記憶」の個々の事例――「レミニサンス」の節と「心情の間歇」の節――との関係についても考察する。
中村氏もそれを前提とするように、『失われた時を求めて』の中には、作者であるプルーストの記述と語り手の記述が互いに透けて見える。なお、小説中の第一人称の分析は、マルタン＝ショフィエの方法[4]――「主人公」「語り手」「作者プルースト」「生活者マルセル・プルースト」の四人の人物に分析――にまで遡ることができる。「無意志的記憶」の事例、「想像力」に関する考察には、この方法を参考にする。

1.「無意志的記憶」と「レミニサンス」[5]

（1） プルーストのいわゆる「無意志的記憶の再生」の表現

プルーストが小説のテーマを表すのに用いる用語は、一様ではない。
第一篇「スワン家の方へ」の刊行に際してのインタヴューで、彼は次のように語る。

> 私の作品はたぶん一連の「無意識の小説（Romans de l'Inconscient）」の試みのようなものでしょう。[…]。「ベルクソン的小説」というのは正確さを欠く言い方になるでしょう。なぜなら私の作品は、無意志的記憶（mémoire involontaire）と意志的記憶（mémoire volontaire）の区別に貫かれていますが、この区別はベルクソン氏の哲学に現れていないばかりでなく、それと矛盾するものでさえあるからです[6]。

プルーストは上記のインタヴューで「どのような時代でも文学は支配的な哲学に結びつこうとしてきた。」と述べ、当時の先進的哲学者であったアンリ・ベルクソン（Henri Bergson, 1859－1941）の哲学に言及しながら、自作の主題を語る。
インタヴューの冒頭では、「無意識の小説（Romans de l'Inconscient）」という一般的な言葉を用いているが、ベルクソンの名前を出した後は、無意志的記憶（mémoire involontaire）という言葉を意識的に使う。ベルクソンが『物質と記憶』の中で《mémoire volontaire》という言葉を二度ほど使っている[7]ことを知っていたプルーストは、無意志的な記憶の再生に関する自分の理論に、「mémoire involontaire」という名称を与えたのであろう。
両者の記憶理論には、相違した点がある。ベルクソンは記憶の定着について語り、その種類を「有意志的記憶」と「自発的記憶」の二種類に分ける[8]。自発的記憶 (la mémoire spontanée. ベルクソンは「純粋記憶」とも呼ぶ) は、生涯に一度起こる出来事の記憶であり[9]、その定着に反復はない。その想起には努力を要するが、偶然的に想起される(mettre caprice à reproduire）場合もある[10]。

> 或る記憶が意識に再現するためには、それは純粋記憶の高みから、行動の遂行を見るまさにその地点にまで、下りてくることを必要とする。換言すれば現在こそ、記憶の応答する呼びかけの出発点であり、現在の行動の感覚＝運動的諸要素こそ、記憶が熱気を借りて活力を与えられる場所なのである。[田島節夫訳][11]

ベルクソンは上記の「自発的記憶（純粋記憶）」と呼ぶ記憶について、その想起に関する種類分けは行わないが、プルーストの方はその想起の種類を「有意志的記憶」と「無意志的記憶」の二種類に分けている（IV, p.448, 458）。このうち無意志的記憶（la mémoire involontaire）は、偶然的に起こるものであり、感覚の関与があるとされる。

ベルクソンとプルーストは、主な議論の対象がそれぞれ記憶の定着と想起である点が異なるが、「感覚を契機とする偶然的な記憶の想起」という概念は共通していると理解できる。

プルーストがベルクソンの言葉を応用する場合、必ずしもその正確な意味を重視するものではない。「レミニサンス」という現象の説明に使われる「時間の外（hors du temps）（IV, p.451）」という言葉は、ベルクソンが使う「時間の外に出る（sortir du temps）[12]」という言葉を思わせる。しかしながら、ベルクソンが記憶の定着について「時間の外」という言葉を使うのに対し、プルーストは記憶の想起を語る際に同じ言葉を当てるのである。

プルーストは、ベルクソンや他の諸家を思わせる用語を小説の数箇所で使っている。この行為は、『失われた時を求めて』の執筆以前から彼がしばしば試みていた、他の文学者のパスティッシュと似た性質のものと考えられる。パスティッシュの特徴の一つは、対象作品の文体、用語等の変形を伴う模倣であるが、そこには批評的、遊技的な要素が含まれる。一方、プルーストは「無意志的記憶（mémoire involontaire）」という語には固執しない。下記の如く、最晩年の評論の一つ「フローベールの文体」の最後の方で、プルーストが自身に触れた箇所で用いる言葉は、「無意識の再記憶（ressouvenirs inconscients）」である。

> 私は作品の最後の巻――まだ刊行されていない巻――で、無意識の再記憶（ressouvenirs inconscients）の上に私の全芸術論をすえる[13]。

ところで、プルーストは、中村氏が区別して考える「無意志的記憶」と「レミニサンス」という言葉の使い分けを行なっているであろうか。

> これは現実的な本だが、「無意志的記憶」を模倣するために、いわば、恩寵(grâce)により、レミニサンスという花柄（花梗、pédoncule）により支えられているのだ[14]。

上記は、プルーストが編集者ルネ・ブルムに宛てた書簡の一節である。「無意志的記憶」を一つの理論とし、それを実現させるために個々の「レミニサンス」が必要だとしている。

なお、花柄（花梗）とは、草花の「花＋萼」と「茎」との間の部分である。「見出された時」中では次のように使われている。「私の経験の内容は[…]スワンから来たのである。[…]。私の全生涯の支えとしては、この花梗は少々細すぎるかもしれない。（IV, p.494）。」

（２） プルースト研究者によるいわゆる「無意志的記憶の再生」の表現

プルースト研究者――特にフランス語圏の――は、「無意志的記憶」と「レミニサンス」という言葉を使い分けているであろうか。

プルーストの創作手帳カルネ１の中の文への編集者の註にも、二つの言葉の使い分けが見られる。カルネ１の本文は、ラスキンの『サンマルコの休息』中の同寺院の写真（論者註：写真ではなくスケッチ）に触発されたレミニサンスの例である。（Carnet 1, 10v°）

> 註103：Cette réminiscence due à la mémoire involontaire semble antérieure à celle que la madeleine déclenchera chez le narrateur, mais elle sera intégrée dans la dernière partie du roman. Voir *Le temps retrouve*, t.IV, p.445-446[15] .

Carnet １の本文への註 103：「無意志的記憶」によるこの「レミニサンス」は、「語り手」の自宅でマドレー

ヌが引き起こしたそれよりも以前のものである。しかし、小説の最後の部分で、これも統合されることになろう。「見出された時」、４巻、p.445-446を見よ。［拙訳］

上記のカルネ１の編集者の註では、「無意志的記憶という現象によってひきおこされるレミニサンス」という解釈が行われている。

草稿原稿への研究者のコメントにはこれらの言葉の混同も見られる（IV, pp.835-836）が、この章の結論としては、プルーストもプルースト研究者も「無意志的記憶」を一つの理論、「レミニサンス」をその個々の例と解釈している、との理解に達することとなる。

２.「心情の間歇」の節と「レミニサンス」の節

（１） 小説中で用いられる「レミニサンス」という語の例

「レミニサンス」の例においては、味覚、体感、聴覚、触覚等の「感覚」や印象の類似が強調されている。

青年時代の語り手は、パリの自宅での紅茶に浸したマドレーヌの味覚から、幼少期に休暇を過ごしたコンブレーでの菩提樹茶に浸したマドレーヌの味覚が蘇り、続いてその町の様子がありありと現れるのを経験した。長い年月を経て、語り手は再び、ゲルマント大公邸のマチネにおいて、そのようないくつかの「レミニサンス」を経験する。大公邸の中庭の不揃いな敷石の体感から、かつて母親と訪れたヴェネツィアのサン・マルコ寺院洗礼堂の床の不揃いなタイルを、糊の利きすぎたナプキンの感触から、かつて祖母や母と滞在したバルベックのホテルのタオルを、皿にあたるスプーンの音から、汽車の旅の途中で聞いた車輪点検のハンマーの音を、語り手は鮮明に想起し、ある至福感を得る。

この至福感は、想起された過去における感情とは異なるものである。恩寵による啓示「レミニサンス」により、現在と過去の偶然的な感覚の類似から記憶の再生がおこる。この時一時的に「時間の外」に出たことで死せる運命を忘れたことによる、至福感なのである。

（２）「レミニサンス」の節とプラトン

［プラトン］

プルーストにおけるプラトンの「想起説（レミニサンス[16]）」の影響は、ジル・ドゥルーズ[17]、ロジェ・ラポルト[18] が指摘しており、中村氏も著書の中で触れている[19]。

プラトンは凡そ次のように言う。「個別の事物の背後には、その本質（善、美、愛、円、机、馬等）のイデア界が存在する。人間が生前にいた世界であり死後に魂が帰る場所である。生まれて肉体を持った人間はイデア界を忘却している。学習とはイデア界の想起に他ならない[20]。」

プラトンによれば、「人間の感覚は、特に視覚は、不完全でありイデアを捉えることはできない。理性（知性）のみが捉えることができる[21]」という。プルーストは芸術論、文学理論において、記憶の再生の契機として感覚を強調し、それを定着させるものとして知性を語るが、感覚を語る段階ですでにイデア界におけるがごとき本質を語っている（IV, p.449）。なお、視覚の不完全さは、小説中で「無意志的記憶」の対極に置いて語られる。

しかし、芸術論、文学理論の部分にプラトンの影響はないものと思われる。プラトンは「芸術」について――ホメロスを敬愛しながらも――「真実を模倣しているに過ぎない現実の世界を、更に模倣した芸術は論外のもの[22]」としているからである。

（３）「心情の間歇」の節とベルクソン

中村氏の指摘のように、「心情の間歇」の節のホテルでの祖母の幻のエピソードにおける記憶再生の際の心身の衝撃は、この部分に固有のものである。又、手足に残る記憶として、語り手が靴を脱ごうとして身を屈めたこの場面にのみ、「無意志的記憶（souvenir involontaire）」という言葉は特権的に使われている。なお、前述のように、祖母と同様に作家の母の置き換えであるアルベルチーヌに関する記述にも一度使われている（IV, p.

277)。

「無意志的記憶」という言葉は、先に見たように、又、中村氏の指摘にもあるように、ベルクソンの著書の中の言葉を意識において使われたものと思われる。

この言葉が使われる「心情の間歇」の節には、他にもベルクソンを暗示するような記憶再生の契機についての箇所がある。

以下に、「心情の間歇」の節の祖母の幻のエピソード部分を掲げる。

> 私の全人格を動転させる衝撃。到着第一日目の夜から、私は疲労のあまり心臓（fatigue cardiaque）が発作をおこしたように苦しいのでその胸苦しさを懸命に抑えながら、靴を脱ぐためにゆっくりと用心深く身を屈めた。けれどもショートブーツの最初のボタンに触れたとたん、私の胸はある未知の神々しい存在に満たされてふくれあがり、嗚咽が身体を揺り動かし、涙がはらはらと目から溢れ出た。今しがた私は記憶の中で認めたところだった。愛情のこもった、心配そうな、[…]、祖母の顔が、私の疲労の上に屈み込んでいるのを。私は無意志的で完全な記憶の中に、彼女の生き生きとした現実を見出したのだ。(III, pp.152-153／No.7, pp.284-285)

「疲労からの心臓の苦しさ」を持つ語り手が、靴のボタンに触れるや否や「心情（悲しみ）」の問題が生じたというものである。

前述のベルクソンの「自発的記憶（純粋記憶）」が再生される契機としての行動にあたるものが、現在における心臓疲労と靴を脱ごうとする偶発的な身体的要素であり、結果としてプルーストの「無意志的記憶」による過去の類似した状況が再生されている。

なお、「心情の間歇（intermittences du cœur）」とよばれるこの事例では――「無意志的記憶」の別の例「レミニサンス（réminiscence）」の場合とは異なり――現在と過去の状況の違い（現在の祖母の不在）を語り手は強く感じ、心情の問題としての悲しみが溢れ出す。

又、フランス語の「cœur」は「心臓」と「心情」の両方を意味するところから、この箇所ではかけ言葉としての意味が意識されているものかもしれない。

更に、この祖母の幻のエピソードは、ベルクソンの理論の次の重要な部分を思わせる。

> […]現在の知覚が過去の知覚との親近さによって働く以上、類似による連合があり、又、元のその知覚の結果生じた運動が再生して、最初の活動と統制下に置かれる無数の活動を伴い得る以上、そこには近接による連合もある。だから、私たちは、類似による連合と近接による連合を、その源泉そのものにおいて、[…]、ここに捉えているわけである。これは私たちの精神生活の偶然的形態ではない。それらは同じただ一つの基本的傾向、即ち、与えられた状況から有益なものを取り出し、起こり得べき反作用を運動的習慣の形で保存して、同様な状況に役立てようとするあらゆる有機体の傾向の相補う二面を表している[23]。[田島節夫訳]

上記では、現在の知覚が過去における記憶の中から特定のものを選び出す過程が、「類似」、「近接」による連合という理論により説明されている。ホテルにおける祖母の幻のエピソードを書いたプルーストは、このベルクソンの理論を消化していたであろうし、又、共感する部分もあったかと思われる。

プルーストが上記のベルクソンの理論を読んだ時点で、文体としての「比喩」に関して如何なる理論を持ち合わせていたかは不明である。しかし、上記のベルクソンの理論のうち、連合に関する「類似」「近接」という二つの語は、現代の文学理論においてプルーストの比喩が議論される際、以下のように使われてもいるのである[24]。

> 麦畑の向こうに見える鐘塔と麦の穂の比喩には、二つの物の形状の「類似」と場所的「隣接」がある。[ジェ

ラール・ジュネット、天野 利彦、矢橋 透訳]

（４）「レミニサンス」の節、「心情の間歇」の節と文学創造の要件

語り手が作家になることを決意する最終篇「見出された時」において、文学創造に必要な要素として挙げられるものは、次の三つに分けることができるであろう。

１．「事物の本質」。「現在の感覚」と「類似した過去の感覚」に共通したもの。
２．「知性」。上記を作品に定着させるため、又、文体をつくるために必要なもの。
３．材料としての「作家の全生涯」。愛、悲しみ、苦しみ、性的倒錯の認識等を含む。

ここまで見てきたように、「レミニサンス」の節と「心情の間歇」の節は、「無意志的記憶」の具体例である。しかし、文学創造の要件への関わり方には、それぞれの特徴がある。

上記区分の１．の「レミニサンス」は、「無意志的記憶」（という花）を支える花柄部分である。事例としては、「スワン家の方へ」中のマドレーヌ、「見出された時」中の不揃いな敷石等が挙げられている。なお、「見出された時」の中には、「ソドムとゴモラ」の中の「心情の間歇」の祖母のエピソードを思わせる記述がある。「[…] 壁面に反映するバラ色の夕焼け、[…]、朝の海の青い渦[…]――そうしたものの中にはごく単純な身振りや行為が、まるで蓋をした無数の壺の中に入れられたように閉じこめられ（IV, pp.448-449)」という箇所であり、手足に残る記憶、記憶が閉じこめられている壺など「心情の間歇」の節における記述がくり返される。「心情の間歇」の節も、「無意志的記憶」の例として見る限り、文学創造の要件の１．に該当する要素を持つと言うことができよう。

なお、「心情の間歇」の節は、「レミニサンス」の節とは異なり、例えば、次章で取り上げる「想像力」の作用を思わせる箇所、これにより生じる「時間の外」の記述はない。

上記区分の２．では、束の間の現象の１．を定着させるため、又、文体を作るために「知性」が必要だと述べられる。文体とは、１．の関連で語られる「作家は異なる二つの対象の関係を提示し、[…]、それを隠喩の中で結びつける（IV, p.468)」等がその一つである。

上記区分の３．では、文学創造の材料として、作家の全生涯が挙げられている。全生涯には、愛、悲しみ、苦しみ、それに関わる人々がある。しかし、長い時間の後には、「愛する人が広大な現実に解消して（IV, p.483)」ゆき、これらは普遍的な言語に置き換えることにより永続的なものになる（IV, p.482)。更に、「観念は悲しみの代用（IV, p.485)」とされるが、どのような感情も最終的には観念となるという、プラトン的収束が見られる。

悲しみや苦しみを与える人々の例として、「心情の間歇」の節と関連づけられる祖母、祖母と同じく作家の母の置き換えとされる恋人アルベルチーヌが語られる。又、「恋の苦しみも[…]創作の折には、一種の心臓病（maladie de cœur）のようにしか感じられなくなる。（IV, p.483)」等、「心情の間歇」の節を思わせる「心臓病」という語が使われる文章が加筆されている。祖母の幻のエピソードは、文学理論の区分３．に還元されるものであろう。

３．「想像力」と「感受性」

「作者プルースト」の想像力については、中村氏の指摘がある。本稿では、「語り手」の書く小説における「想像力」、又これと両輪をなす「感受性」について考察する。

（１） 想像力

『失われた時を求めて』の習作とされ、1900年に放棄される未完の小説『ジャン・サントゥイユ』中の「ジュネーヴ湖を前にしての海の回想」には、「想像力の与える喜びは、想像力の優越性の徴しで[…]。永遠の本質を対象としている状態の優越性の徴しであろう[25]（鈴木道彦訳)」という表現が見られる。記憶の回想が語られているが、「無意志的記憶」という概念は導入されていない。又、想像力が強調されてはいるが、未だ『失われた時を求めて』の「作者プルースト」は登場しておらず、ここでの記憶の回想は、後に「生活者マルセル・プルースト」と呼ば

れる作家の実体験に遠くないものと推量することができる。

なお、同じ箇所の「一切の持続の外にあって」はベルクソンを、又、「想像力が永遠に仕える器官であること」は、「永遠」を「美」と読み替えた場合、プラトンを思わせる。

『失われた時を求めて』の「語り手」の書く小説中の「想像力」は、三つの意味を持つ。

一つは、「美を享受する唯一の私の器官である想像力、[…]。過去だから私の想像力がその感覚を味わえたのだし、又、現在だからそこでは私の感覚器官が[…]。(IV, pp.450-451)」という表現に見られる。「過去の感覚」は想像力によってのみ味わうことができ、又、「美」は、現実の知覚ならぬ、想像力によってのみ捉えることができる、というものである。

二つ目は、「ナプキンの堅さは、私にバルベックを、部屋の匂いや、風の速さや、[…]、一瞬の間それは私の想像力を愛撫してくれた。(IV, p.455)」という表現に見られる。想像力により得られた過去の感覚を契機として、「あっという間に千度も旋回する天使の翼」の喩えが使われ（IV, p.455)、一瞬の連想が一度に次々とおこるというものである。

この二つ目のものは、「作者プルースト」の想像力と重複する部分があるが、「作者プルースト」の想像力が書き替え、推敲に長い時間を必要とするのに比べ、「語り手」の想像力による連想は一瞬のものとされている。小説の設定としては、「語り手」の回想の内容は実際の出来事であり、「想像力」が「記憶」を補充するというものである。

なお、第六篇「逃げ去る女」中に、文学理論とは別の文脈であるが、「未知の状況を思い描くのに、想像力は既知の要素を借りてくる。(IV, p.8)」という箇所があり、これは、「想像力は記憶を背景とする」という主張である。この文は辞書[26] の例文にも使われている。

三つ目は、「無意志的記憶の経験においては、現在の感覚が、ふだん想像力には欠けている存在の観念をつけ加える。その結果、ほんの一瞬、少しばかりの純粋状態の時間を獲得した。(IV, p.451)」というものである。即ち、想像力は、「時間の外に出る」状態を作り出すのである。1910～11年の草稿では「その至福感、想像力の中でしか実現しないその存在の糧や忘我を、感覚はもたらしはしない[…]。」（IV, p. 809, Esquisse XXIV）と表現される。

（２） 感受性

「レミニサンスのような（à la façon des réminiscences）（IV, p.456)」と表現されるところの、「レミニサンス」に至らなかった現象、山査子の垣根、三本の木等、「過去の記憶ではない（IV, p.456)」とされるものは、『失われた時を求めて』においてどのように扱われているのであろうか。次の表現が説明する。

> 文学の創造にあたり、想像力と感受性は必ずしも交換不可能な資質であるとは限らないし、[…]（IV, pp.479-480)。

過去の感覚ではないこれらのものは、「感受性」が受け止めるというのである。上記の「逃げ去る女」中の記述に続く部分がある。「感受性は、[…]、新しい事件から[…]、独特の、長い間消えることのないサインを受け取る。(IV, p.8)」。既知の要素を借りない「感受性（senbibilité)」なる概念が「想像力」に代わるのである。

又、文学創造の要因の三つ目「作家の全人生」については、次のような記述がある。

> (かつてスワンがいい加減に口にした：)「君はバルベックに来るべきだな」といった言葉から、こちらの全生涯や作品は生まれたのであった。[…]。(しかし、）状況を切り開いたのは私たちの感受性と知性であり、(IV, pp.493-494)

（３） 想像力、感受性と比喩

プルーストが互換性ありとする「想像力」と「感受性」であるが、「想像力」の方は、現在においても働くが、「記憶」に対しても働く。これは中村氏の指摘による意味での「作家プルースト」の作為としての「想像力」ではな

く、「語り手」の書く小説の中で堂々と語られる「想像力」である。

又、「想像力」と「感受性」は、共に文体としての比喩に関わる。比喩とは、二つのものに共通の要素を見出すことに他ならず、この二者の互換性を理解することができる。この二つは、「見出された時」中で語られる文学創造の要件の１．と２．に関わりを持つ。

プルーストは「想像力」と「感受性」を文学創造に不可欠なものと見なしていた。『失われた時を求めて』執筆以前の書簡中では自分の想像力に自信を失った旨を語り[27]、又、『サント＝ブーヴに反して』の中では、「感受性」の衰えを語ってもいる[28]のである。

結論

小説中には「真理が始まるのは、作家が異なる二つの対象の関係を提示しそれを美しい文体の必然的な環の中に閉じこめた時」という芸術論が示される。これに先立ち、「現在の感覚」と、無意志的記憶の中に出現するところの「類似した過去の感覚」という二項対立が展開される。

本稿で「無意志的記憶」の事例の一つと考える「レミニサンス」の節は、すでに指摘があるように、プラトンの影響が見られる。プラトンは「イデア界における事物の本質」を、「知性」との関連で語っている。これに対し、プルーストは、下記の文学創造の要件の１．につながるところの「感覚」との関連でこの問題に触れており、そこで得られる事物の本質の定着に関してはじめて「知性」について語る。又、プラトンが述べる「過去の記憶の想起における視覚の不完全さ」も「無意志的記憶」の理論に使われている。

同じく「無意志的記憶」の事例の一つと考える「心情の間歇」の祖母の幻のエピソードの節は、中村氏の指摘のように、「無意志的記憶」という言葉が特権的に使われ、心身の衝撃を伴う唯一のエピソードであるところにその特異性は認められる。

しかしながら、「無意志的記憶」という言葉が暗示するように、ベルクソンを思わせる要素がそこにはあると考えられる。一つは記憶再生の契機となる感覚的な要素（身体的な要素を含む）の問題であり、もう一つはこの問題に関するベルクソンの理論における「類似」と「隣接」という用語と概念のプルーストの比喩の特徴との関連性――プルーストが比喩を理論化していたか否かは不明であるが――である。

又、「無意志的記憶」の個々の事例は、作家志望の語り手が挙げる次の文学創造の三要件にそれぞれ、該当する。

１．「事物の本質」。「現在の感覚」と「類似した過去の感覚」に共通したもの。
２．「知性」。上記を作品に定着させるため、又、文体をつくるために必要なもの。
３．材料としての「作家の全生涯」。愛、悲しみ、苦しみ、性的倒錯の認識等を含む。

更に、「無意志的記憶」に関する記述中には、「想像力」と「感受性」の対比が認められる。中村栄子氏の主張する「プルーストの想像力」とは、「作者プルースト」の作為であり、小説中の「想像力」と言う言葉は、この意味で使われることはない。「想像力」なる言葉が使われる箇所は「語り手」が書く小説部分であり、過去の記憶を背景としている。又、この二者は、上記の文学創造の要件の１．「事物の本質へ導くもの」と２．「知性」に関わる。なお、この二者が作用する対象は、３．材料としての「作家の全生涯」である。

作家志望の「生活者マルセル・プルースト」の情熱と記憶や感受性に浸された「作者プルースト」は、想像力を駆使し「語り手」に小説を書かせる場を用意する。

「語り手」が「無意志的記憶」を信じて書く小説の内容は、何が書かれているかより、如何に「無意志的記憶」なるものを伝えているか、という意味において真実であると言える。

以上から、「作者プルースト」には、中村栄子氏の指摘にあるような作為、矛盾があったとしても、「語り手」の書く小説は、「無意志的記憶」を原動力とし、比喩を主体とする文体の完成を目指したものである、と結論づけることができる。

註

1．Marcel Proust, *A la Recherche du temps perdu*, Pléiade, Gallimard, 1987-1989.
マルセル・プルースト、鈴木道彦訳、『失われた時を求めて』、集英社、1996-2001.

2．Jean-Yves Tadié、吉川一義訳、『評伝プルースト』、下巻、筑摩書房、2001, pp.3-9.
プルーストは、カーライルやエマーソン等に、その芸術論の多くを負っている。

3．中村栄子『プルーストの想像世界』、駿河台出版社、2006.

4．Louis Martin-Chauffier, *Proust et le double 'Je' de quatre personnes* in *Confluences*, numéro spécial, *Problèmes du roman*, 1943, pp.54-69.

5．本章以降の引用文への、(　) 内の原語挿入、**太字化**、下線付記は論者による。

6．マルセル・プルースト、鈴木道彦訳、『プルースト全集』、筑摩書房、No.15, 1991, p.232.

7．Henri Bergson, *Œuvres*, Édition du Centenaire, Presses Universitaires de France, 1959, p.233, p.258. アンリ・ベルクソン、田島節夫訳、『物質と記憶』、白水社、2003, p.102, p.131.

8．*ibid.*, p.225-235.　同書、p. 91-105.

9．*ibid.*, p.226.　同書、pp.93-94.

10. *ibid.*, p.234.　同書、p.103.

11. *ibid.*, p.293.　同書、p.173.

12. *ibid.*, p.228.　同書、p.98.

13. マルセル・プルースト、鈴木道彦訳、『プルースト全集』、第15巻、筑摩書房、1991, p.22.

14. マルセル・プルースト、岩崎力訳、『プルースト全集』、第17巻、筑摩書房、1993, p.462.

15. Marcel Proust, *CARNETS*, établie et presentée par Florence Callu et Antoine Compagnon, Gallimard, 2002, p.49.

16. *Le Petit Robert, Langue Française*, texte remanié et amplifié sous la direction de Josette Rey-Debove et Alain Rey, Dictionnaires le Robert, Paris, 1993, p.2155.

17. ジル・ドゥルーズ、宇波彰訳、『プルーストとシーニュ』、法政大学出版局、1992, p.4, pp.121-126.

18. ロジェ・ラポルト、山本光久訳、『プルースト／バタイユ／ブランショ』、水声社、1999, pp.39-56.

19. 中村栄子、前掲書, p.93, p.117.

20. プラトン、岩田靖夫訳、『パイドン』、岩波書店、岩波文庫602、2007, pp.54-65.

21. プラトン、種山恭子訳、『ティマイオス』、岩波書店, 1975, pp.81-83.

22. プラトン、藤沢令夫訳、『国家』(下)、岩波書店、ワイド版岩波文庫206、2002, pp302-339.

23. Henri Bergson, *op.cit.*, p.306.　前掲書、pp.187-188.

24. ジェラール・ジュネット、天野 利彦、矢橋 透訳、『フィギュール III』、水声社、1987, pp.110-111.

25. Marcel Proust, *Jean Santeuil*, Pléiade, Gallimard, 1971, p.399.　作家は1900年に執筆を放棄.

26. *Le Petit Robert, Langue Française, op.cit.*, p.1263. “imagination” の項.

27. ProustからM.Nordlingerへ, 1899.12.5、吉田城訳、『プルースト全集』16、筑摩書房、1989, p.194.

28. Marcel Proust, *Contre Sainte Beuve*, Pléiade, Gallimard, 1971, p.2.